



### 下出民義

下出民義、幼名・梅吉は、文久元（1861）年12月8日、和泉国南部岸和田（現大阪府岸和田市）に生まれました。明治8年、15歳で小学校の教員になり、働きながら関西法律学校（現関西大学）に通いました。教員としては、後に小学校の校長まで勤めています。明治20年、石炭商の西井直次郎らとともに「大阪石炭会社」を設立します。校長職を辞めて入社しましたが、ほどなく会社は倒産、明治22年には、名古屋に移り住み「愛知石炭商会」を設立しました。当時の名古屋紡績などの工場にボイラー燃料となる粉炭を販売し、会社を軌道に乗せた下出は、次第に北海道炭礦鉄道とも石炭の取引を始めます。当時、この会社で監事を務めていたのが福沢桃介です。二人は知己となり、桃介が名古屋に来るきっかけのひとつになりました。



名古屋の電力事業に興味を持っていた桃介は、下出や、三井銀行名古屋支店長で慶應義塾大学の先輩だった矢田積と協力して名古屋電燈株式会社の株を買ひ集めると、筆頭株主として常務取締役に就任。その後、桃介が社長となった際には、下出が常務取締役兼副社長となりました。真面目で堅実な性格だった下出は、桃介の居室である、華やかな二葉館に出入りすることをあまり好んではいなかったようですが、名実ともに桃介の右腕となって支えながら、名古屋の電力事業発展に尽力しました。その後は、大同電力の取締役や株式会社電気製鋼所（現・大同特殊鋼）の初代社長などに就任しながら政界にも進出し、名古屋市の議会議員や衆議院議員、貴族院議員を務めました。

一方で、下出は「私財は社会に還元すべき」という信念や、元々教育者ということもあり、未来ある若者の育成にも注力していました。大正12（1923）年には、名古屋市中区南新町（現・名古屋市中区）に東邦商業学校（現・東邦学園）を設立。「真面目」を校訓とする学校で「真に信頼して事を任せうる人格の形成」を建学の精神とし、「現代社会の求むる着実なる実業青年」の養成を目指す教育理念は、現在も引き継がれています。

下出民義は、名古屋のエネルギー事業のみならず、名古屋の教育文化にも大きく貢献した人物だったのでした。

## 花鳥風月 其二

### 床のこだわり

文化のみち二葉館には、表玄関から入ってすぐに、大広間と呼ばれるホールがあります。ここは、福沢桃介が名古屋の経済界人を招き、川上貞奴がお客様をもてなしていた場所で、創建当時から残るステンドグラスや円形ソファなどが設置された、二葉館のメインスポットです。

この大広間について、お客様からよくいただく質問があります。「すてきな床ね！ みんな色がちがうけど、何の木かしら？」

大広間の床は、色味が違う種類の木材を組み合わされており、寄木張りの工法やデザインも相まって模様が生体的に見えます。



写真1 大広間

写真2のように、床の大部分は、薄茶色の木材（A）が濃茶色の木材（B）をはさんでいる形の床材を、交互に90度ずつかたむけて敷いてあります。このAの木材はナラ、Bの木材は、ケヤキです。ナラもケヤキも日本に古来からある木で、昔から建築物に多用

されてきました。ナラは伸縮性が少なく、ゆがみにくい特徴から床材によく使用されます。また、ケヤキはとてもかたく耐久性のある木材で、大黒柱や神社仏閣といった頑丈で大切なものに利用されてきました。

床の壁際にあたる写真3のデザインでは、サクラ（C）チーク（D）、メープル（E）の三種類が使われています。こちらは複雑な形のため、加工しやすい木材が選ばれているようです。特に、一番小さな三角形の部分を担当しているサクラは、浮世絵などの木版画の版木として活用されたり、家具に使用されたりするなど、古くから様々な加工品に用いられてきました。一方、チークとメープルは海外からの輸入材です。チークは、東南アジア原産の木で耐水性にすぐれています。メープルはカエデ科の木材を指し、傷がつきにくいことが特徴です。チークもメープルも、大正時代の日本ではまだめずらしい木材で、大変高価なものだったのではないのでしょうか。

ちなみに、復元された寄木張りの床に敷かれた木材はチークだけで470枚、ナラだけでなんと3500枚以上もあるそうです。館内をご覧の際は、ぜひ床にも目を向けてみてください。

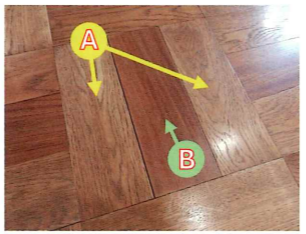


写真2

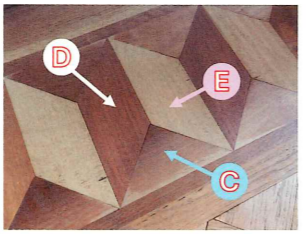


写真3



このコーナーでは折に触れ二葉館近隣地域をご紹介します。

### 花ごよみ 太閤本店

「名古屋名物は？」と聞かれると、味噌カツ、味噌煮込み、あんかけスパゲッティ、天むす...と、いろいろありますが、特定のメニューではなく一つの文化として「モーニング」があります。発祥の地といえば諸説ありますが、名古屋のモーニングも有名です。文化のみち二葉館のお隣にある「花ごよみ」は、そのモーニングが人気のカフェです。朝の時間帯は、飲み物を頼んでトーストやおにぎりなどのメニューを選べると、付け合わせにミニサラダや茶わん蒸しがセットになって、飲み物代のみで提供されます。リッチな気分まで一日をスタートさせることができますね。また、モーニングの時間以外は、ぜんざいなどの甘味もありますが、メニューには海鮮チラシやビビンバ、冬なら味噌煮込みうどんなどもあり、食事もお色々楽しめます。はす向かいにある「太閤本店」の系列店ということもあり、食事のお味は間違いなしです。

「太閤本店」は、しゃぶしゃぶと会



モーニング定食

席料理の老舗です。古民家風の店構えに落ち着いた雰囲気の内店で和食を提供しています。お昼時間限定の「太閤定食」は、メイロンや小鉢が日替わりで、プチデザートも付いた色とりどりのお皿がお盆いっぱいに乗って運ばれます。日常の贅沢を感じるメニューです。「太閤本店」「花ごよみ」など複数の店舗を営んでいる「たいこうフーズ」の本社は文化のみちにあります。創業から六十余年一貫して「お値打ち」を目指しているだけに、食事の満足度も高く保たれているのではないのでしょうか。

ちなみに、太閤本店の建つ場所は、尾張徳川家の家臣であり、現代において尾張藩資料として貴重な「鸚鵡籠中期」という日記を遺した朝日文左衛門が住んでいた跡地です。

文化のみち二葉館の近隣には様々なお店があります。文化のみち散策のお食事や休憩にお立ち寄りになってはいかがでしょうか。



太閤定食



太閤本店

## from Archives 書庫棟から 魔法の世界



『わたしのママは魔法の国からママがきた!』(作・藤真知子 絵・ゆーちみえこ/ポプラ社刊)  
『まじよ子どんな子ふしぎな子』(作・藤真知子 絵・ゆーちみえこ/ポプラ社刊)

は、いろんな魔法が登場します。「まじよ子」シリーズの主人公は、いたずらが大好きな女の子「まじよ子」。まじよ子は、まだ修行中の魔法なので、たまに失敗したり、ママにしかられたりもしますが、出会った子どもたちの願いをかなえたり、おかしな国やおぼけがあるお城など、楽しい冒険に連れて行ってくれます。「わたしのママは魔法」シリーズの主人公・カオリのママは、なんと、夜空を飛んでいるときに国際線パイロットのパパと恋に落ちた魔法使い「カオリのまわりでは、毎日ふしぎな出来事やドキドキの騒動が起こります。ほかにも、魔法が使える家政婦のナニさんや、魔法のランプの精霊をご先祖様にもつちやミーなど、魅力的な魔法がいっぱいあります。

2月からの文学企画展「まほうがいっぱい!」—いたずらまじよ子と藤真知子展—では、2025年12月で刊行40周年をむかえた「まじよ子」シリーズを中心に、皆さんにふしぎでわくわくする藤真知子先生のお話をご紹介します。ぜひ、お楽しみに!

皆さんは、魔法使いや魔法使いの魔法が現れる物語を「ファンタジー」と呼びますが、これは空想や幻想をあらわし、しばしば「メルヘン」(ドイツ語で童話・おとぎ話などの意)と同一視されることもあります。

皆さんは、魔法使いや魔法使いの魔法が現れる物語を「ファンタジー」と呼びますが、これは空想や幻想をあらわし、しばしば「メルヘン」(ドイツ語で童話・おとぎ話などの意)と同一視されることもあります。

皆さんは、魔法使いや魔法使いの魔法が現れる物語を「ファンタジー」と呼びますが、これは空想や幻想をあらわし、しばしば「メルヘン」(ドイツ語で童話・おとぎ話などの意)と同一視されることもあります。

皆さんは、魔法使いや魔法使いの魔法が現れる物語を「ファンタジー」と呼びますが、これは空想や幻想をあらわし、しばしば「メルヘン」(ドイツ語で童話・おとぎ話などの意)と同一視されることもあります。



©藤真知子・ゆーちみえこ/ポプラ社